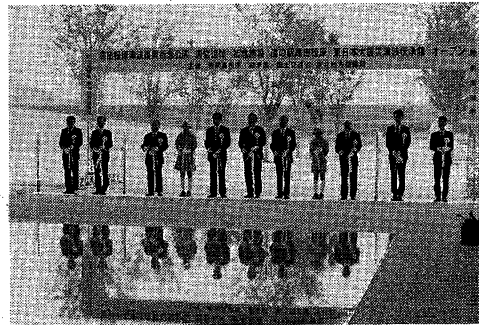


震災の記憶と教訓を国内外へ発信

二度と悲しみを繰り返さないために——。国と岩手県、陸前高田市が連携して事業を進めている高田松原津波復興祈念公園の主要施設となる国営追悼・祈念施設の一部と道の駅・高田松原、東日本大震災津波伝承館が22日、オープンした。宮城と福島を含む「被災3県」に国と地方公共団体が連携して整備する復興祈念公園で供用したのは初めて。2020年度中の全体完成を目指す。



テークカット。中央左から）遼増知事、赤羽国交相、戸羽市長

高田松原津波復興祈念公園が供用

11年3月11日に発生した東日本大震災の津波で、同市は県内最大の被災地となり、多くの犠牲者とともに、7万本の松原があった高田松原の砂州と松がほぼ流出。震災による犠牲者への追悼と鎮魂、震災の記憶と教訓の伝承、国内外に向けて復興への強い意志を発信する場として同公園を整備している。

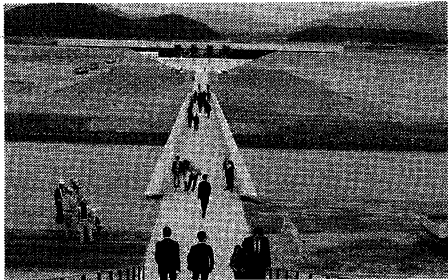
計画区域は約1300㌫。津波が来襲した広田湾方向と遡上した気仙川上流方向を結ぶ「祈りの軸」、奇跡の一本松や道の駅、津波伝承館、震災遺構・タビック45、海岸

防潮堤などを一体でつなぐ「復興の軸」を中心に、追悼の広場や献花の場、海を望む場などの式典空間などを備える。東日本大震災津波伝承館「いわてTsunamiメモリアル」は、RC造2階建て延べ7079平方メートル。このうち展示面積は1155平方メートルで、来館者を迎えるエントランスはインフォメーションゾーンとして同公園や市、三陸沿岸地域、3・11震災伝承ロードなどの情報を提供。「歴史を心もとへ」「事実を知り」「教訓を学び」「復興を共に

進める」の4ゾーンに分かれる展示エリアには、震災当時の東北地方整備局災害対策室の移設再現など約150点の資料が展示されている。

また、道の駅・高田松原は、津波で全壊した建物を三陸沿岸地域の玄関口として再建。規模はRC一部S造2階建て延べ4340平方メートルで、内部は県産のカラマツを使用し、優しい光とともに木に囲まれた居心地の良い空間を演出。食堂やカフェ、農産直販所、土産、市内事業者によるチャレンジショップに加えて、防災グッズなどを取り扱う店舗もある。

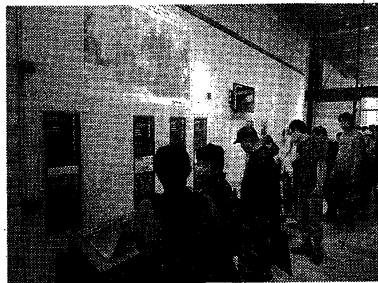
設計は公園全体がブレック研究所、管理棟はブレック研究所・内藤廣建築設計事務所JVが担当。



祈りの軸の先にある道の駅と津波伝承施設

地域全体の発展に寄与する存在を期待

津波伝承館の展示を見つめる市民



工事は公園が平野組と小岩井農牧、建物は建築が西松建設、電気は四電工、機械は大成設備がそれぞれ施工した。

この日の式典には、高田宮妃久子さまを始め、赤羽一嘉国土交通相、田中和徳復興相、遼増拓也知事、戸羽太市長のほか、工事関係者ら約290人が参列。黙祷をささげた後、代表者によるテークカットが行われたほか、日本造園建設業協会宮手原支部の要請で住友林業筑波研究所と森林総合研究所林木育種センター東北育種場が接ぎ木で増殖させた「奇跡の一本松」の後継樹3本の記念植樹も行われた。

席上、赤羽国交相は「被災地の復興への戦いは続くが、この公園が復興からの象徴、一里塚として地域全体の発展に大きく寄与する存在となることを心から期待す

道の駅は多くの来園者でにぎわった



る。引き続き新しい東北の復興が前進するように地域に寄り添いながら全力で取り組む」と強調。遼増知事は「震災の事実と教訓を世界中の人と共有し、これまでの世界中からの支援に感謝し、復興に取り組む姿を国内外に発信したい。引き続き国や市町村、関係者と連携して三陸のビルド・バック・ベター（より良い復興）を実現させる」とし、戸羽市長も「追悼の場、防災教育の場として多くの人に訪れてほしい」と語った。

また、来賓の高田宮妃殿下は「被災者かごなたも取り残されることなく、1日も早く平穏な日常を取り戻せるように、被災地の復興を心から願っている。犠牲者への追悼と鎮魂に思いを寄せる場所となり、震災の美情と教訓を広く国内外に伝承する場となつてほしい」と述べられた。